特244
917

思想戰の本義

下中彌三郎著

日本精神文化研究所

(研究報告)

0056605000

0056605-000

特２４４－９１７

思想戦の本義

下中弥三郎・著

日本精神文化研究所

昭和１８

AJD

特244
917

下中彌三郎著

思想戰の本義

（研究報告第一輯）

日本精神文化研究所

時244
917

日本精神文化研究所 研究報告豫告

第一輯　思想戰の本義・　下中彌三郎
第二輯　日本精神文化の本質　鈴木重雄
第三輯　「八紘一宇」精神考　塚原富衛
第四輯　葦原中國考　佐藤彬
第五輯　國民教育の重點　八並誠一
第六輯　統制經濟の主體性　山川時郎
第七輯　飛鳥文化考　佐藤孫二
第八輯　農業への反省（科學と世界觀）　前田寅雄
第九輯　大東亞戰爭と日本映畫の構想　猪俣勝人
第十輯　統制經濟下の經濟計算　菊池萬輔
第十一輯　神社を基本とする皇道實踐策に關する私見　小原巖雄
第十二輯　幽顯觀と女性　萬澤まき
第十三輯　神々の祭典（日本藝能序說）　田畑喜作
第十四輯　婦人の勤勞とその根本問題　柏原秀子

報告

所報は幸ひにして好評であつたが、三號以下は都合に依り當分發行を停止する。今後は月二冊程の割合で逐次研究報告を發行して行くことにした。小冊子ではあるが內容は豫告のやうに各々眞摯な題目を捉へてゐる。諸賢研鑽のよすがともなれば幸甚である。

○女性文化研究會の誕生　婦人の力に大きな期待がかけられてゐる今日、各自がその分野で最もよく生きるためには、正しい世界觀と正しい女性觀の把握がなければならない。研究所に於てはその目的のために女性文化研究會を企圖し、同志を糾合して六月十六日午後五時半より第一回會合を次の通り開催した。

出席者　藤田、磯谷、佐々木、木村、安藤、松兼、土田、竹內、唐戸、後藤、柏原、萬澤。

萬澤所員より研究所の趣旨並に女性文化研究會開催の意圖を說明。出席者の自己紹介の後、今日の女性問題につき眞摯な意見を交換、最後に今後の研究方針について懇談し次の通り申し合はせた。

一、目的　世界觀の把握。女性觀の把握。女性文化の研究。

一、方法　每回主題を定め、その要旨を事前に印刷し配布する。

次回は七月二十一日（水曜日）　課題は「幽顯哲學」。今日の女性文化問題に積極的な關心を有たれる諸氏は奮つた參加されたい。但し當分會員は女性に限定する。

紹介　猪俣勝人氏（映畫脚本作家）、八並誠一氏（教育家）、小原巖雄氏（神道研究家）本月より右の三氏が所員として加盟された。し

思想戰の本義

下中彌三郎

一

思想戰の本義は一般に明確になつてゐない。當面してゐる世界維新戰を勝ち拔くために、思想戰の必要が叫ばれてはゐるが、一般には思想宣傳の方面が强く表に出てゐて、思想戰の根柢が判然と把握されてゐない。

現前の戰爭は總力戰である。思想戰は總力戰の一翼であると同時に、總力戰の全般を貫いてその根柢を決定する。武力戰が先頭に立つ。經濟戰が後に續く。思想戰が並行する。思想戰は、敵の精神を挫くために、敵の陣中にも行はれる。敵の背後にも行はれる。敵の周邊にも行はれる。味方の戰意を昂めるために、味方の戰線の陣中にも行はれる。銃後の國民生活の中にも行はれる。占據地區の住民の中にも行はれる。思想戰は、目に見えないが、その發動は恐ろしい力を有つ。

思想戰は、總力戰の一翼であるばかりでなく、思想戰こそ總力戰の根柢であり思想戰こそ皇戰の本質である。皇戰の本質が八紘一宇の世界維新戰であり、世界維新戰の本義が世界皇化の思想戰である以上、思想戰こそ總力

戰(武力戰、經濟戰、狹義の思想戰)の頭腦であり指揮刀である。總力戰の一翼としての思想戰、これを狹い意味の思想戰とするならば皇戰則世界維新戰として思想戰は取りも直さず廣い意味或は高い意味の思想戰である。從つて高い意味の思想戰の中には武力戰も經濟戰も狹い意味の思想戰も含まれる。皇戰は、普通に考へらるゝ戰ではなく皇稜威の世界光被の戰である。大義ヲ八紘ニ光被シ坤輿ヲ一宇タラシメ給ふ大御心の發動であり、皇國の理想顯現の戰である。

二

皇國にありては、戰爭はすべて皇戰である。大義を宇內に布く、これが皇國獨特の戰爭意義である。ことむけやはす、即ち服ふものは哺み育て、服はざるものは討ち懲らす、斯ういふ戰の原義に基いて爲されてゐる戰である。聖戰であり神軍である所以である。日清の役、日露の役、みな白人の帝國主義の亞細亞侵略に對する反擊として起つた戰である。支那事變、引續いての大東亞戰爭もまた英米勢力の亞細亞に對する侵寇、それに對する反擊、亞細亞の救ひとして起上つた戰である。世界を、建直さんとする世界維新戰である。歐米帝國主義の亞細亞侵寇に對して反擊する所以のものは、反擊せねばならない對象、即ち彼等の文明が前面に立ちふさがつてゐるからである。

三

西方の文明の本質は、支那流の言葉で言ふならば、これは覇道文明である。日本の言葉で言へば領ける力、そ

の本質に於いて存在に價しないものが無法に地位を占めてゐる。覇道文明の本質は何であるか。人生哲學上では個人本位の文明である。個を中心として全を考へる文化である。全を考へないわけではないけれども、個の實現の爲に全を考へるのである。所謂、個人主義文化である。その個人主義文化が、經濟生活の上に現れて、資本主義の形態を採り、政治生活の上に現れて、民主主義の形態を採つてゐる。この個人主義思想は、フランス革命の合言葉、自由・平等・博愛となりアメリカ獨立の合言葉、人民による人民のための人民の政治となつた。個人主義文化は、別の方から申せば、個人の自由を極端に主張する文化であるから自由主義の文化とも言はれる。資本主義といふのは經濟的自由主義であり、民主主義といふのは政治的自由主義である。個人主義と自由主義とはその表現の形式に違ひはあつても、その本質は同じものである。自由主義は即ち個人至上の人世觀から咲き出でた花、その經濟面をなす資本主義、その政治面をなす民主主義、何れも實は文化といふには價しないものである。その本質なくして文化の位をかりに得てゐるのが、西の文明であつたのである。この西の文明、今日ではアングロサクソンによつて代表せられる文明、このアングロサクソン文明に對しては、ヨーロッパに於てもすでに批判されてゐる。全體主義と稱せられる新しい指導精神がヨーロッパにも現れて來てゐる。しかし、全體主義も、根柢に於ては個人至上の人生觀から拔けきらぬ多くの面を持つてゐる。全體の理想、全體の利益、全體の主張に重點をおいて、沒落せむとするヨーロッパ文化を支へようとする、さういふ力として現れて來たものとしては、一つの示唆をもつてはをるが、それがそのまゝ來るべき世界秩序の指導精神に價ひするものであるとは思はれない

多くの研究すべき批判すべきものが殘されてをる。しかしながら全體の繁榮、全體の理想といふことを高く掲げるところに、資本主義、民主主義を抑へて行くだけの力を持つてゐることは言ふまでもない。從つて、全體主義國のドイツに於ては、民族的な思想を根に持たなければ、その全體主義は、砂を漆喰で固めたやうな形にしかならない。血が通はないといふ觀方からして、歴史主義をこれに加へて全からしめようと努力してゐる。即ち古の野蠻人ゲルマンの行動性を國民の心に喚び起すことによつて永遠性を保たせたい、理想性を附與したいと考へてをる。一面にまた、東洋の思想を研究し、就中日本の歴史哲學を研究して、ゲルマニズムの新しい出立を意味づけようと努力してゐる。ところが日本には、理想的な全體主義がある。ドイツ流の全體主義でなく、日本風の全體主義が古來傳つて來てゐる。それは唯一絶對の神聖なる天皇を中心として、これにまつろひ、一切を捧げまつる、こゝに理想的な全體主義のすがたがある。これを今日、顯現することは、日本の力を强めるばかりでなく、それが段々全世界に解つて來れば、アジヤの諸國諸民族の歸一は勿論のこと、全世界全人類の歸一の中心が明白になる。

四

皇戰としての思想戰の第一義は、個人至上主義のアングロ文明、うしはける覇道文明の折伏、これである。覇道文明の折伏と申しても、折伏する指導力、力の源がなくてはならぬ。その力の源が日本にある。覇道文明を折伏する主體的實力は、日本自からの、古來傳はれる日本的全體主義の眞實の姿を顯現する外にはない。從つて

皇國の眞姿顯現と覇道文明の折伏、これが出來れば、さらに世界維新の斷行、日本世界の建設といふことも自づと出來る。皇戰としての思想戰は、第一には、覇道文明の折伏、第二には、皇國の眞姿顯現、第三には、日本世界の建設といふことになる。そこで覇道文明の折伏といふことは、然らば思想的になし得らるゝか。思想的にこれを表現するだけでは出來ない。覇道文明を折伏するためにはどうしても武力戰、經濟戰、思想戰をあはせ戰はなくてはならぬ。從つて皇戰としての思想戰の立場から言へば、總力戰は覇道文明の折伏といふことをその使命としてゐる。しかし覇道文明を折伏し得たとしても、それだけでは思想戰としての皇戰が完了するものではない。覇道文明の折伏に、皇國の眞姿顯現の事實が、裏付けられなくてはならない。覇道文明の折伏といふことと、皇國の眞姿顯現といふことは、楯の兩面であり表裏一體をなすものである。覇道文明の折伏の爲に、前に申した總力戰——即ち武力戰、經濟戰、思想戰が營まれる一方に於て、日本の眞姿顯現の戰が同時に營まれなければならぬ。然らば、その眞姿顯現の內容は何であるか。日本の歴史哲學、日本學の實體を明白に掲げ出すといふことが一つ、また日本の文化を歴史的にはつきりさせることが一つ、また日本獨得の經濟學、皇國經濟學をはつきりと描き出すことが一つである。日本學の實體、日本の歴史文花、日本の道義的經濟學をはつきりさせることが、取りも直さず皇國の眞姿顯現である。しかしながら、これは靜的な方面に付て數へ立てただけのことで、實は覇道文明の折伏そのことが動的な意味に於ての皇國の眞姿顯現になつて行くのである。つまり覇道文明の折伏の目的を達するためには、皇國の眞姿顯現といふ思想戰が、きびしくするどく國の內外に於て戰はれ、また把持され、

また押し進められて行かなければならぬ。そしてまた、これを行ふ爲には更にそれに先行する皇國の理想が、はつきり把握されてゐなければならぬ。

五

皇國の理想、或は使命は、然らば何であるか。歸着するところ、天神諸の神勅に現れてゐる、『この漂へる國を修り理めかため成せ』と仰せられてある所謂『修理固成』の神勅、更に修理固成の方途を表現せられてあるところの、神武天皇の『六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇と爲ん』と仰せられてある『八紘一宇』の詔勅、さうして、今上天皇陛下によつてこれを更に綜合的具體的に宣せられた『萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安ンゼシム』と仰せられてある『萬邦得所』の詔勅、これに一貫内在するところの思想が皇國の理想である。この理想が覇道文明折伏の旗印であり、またこの旗印によつて日本の歴史、文化、經濟といふものをすつきりと畫き出して來れば、そこに今言つた日本の國の理想、日本國民に與へられてある使命がはつきりする。而もこの理想、この使命は單に日本の國内、或は亞細亞に於て行ふところの理想であり、使命であるばかりでなく、世界新秩序の理想でもあり使命でもある。即ち日本世界建設の理想でもあり使命でもあるのである。この意味に於て我々は思想戰を戰ふ、思想戰即皇戰としてのこの思想戰を戰つて行く、これが、思想戰の本義ではないか。

六

思想戰といふと、すぐに宣傳謀略といふことに結びつけて考へがちであるが、宣傳謀略といふ類ひのことは、皇國にありては思想戰の本筋ではない。古來、日本は言擧げせぬ國である。此の點、宣傳本位の外國とは全く裏腹である。今、世間で喧しい宣傳謀略といふことは、皇國本來の手法ではなくて、歐米の手法の模倣であり移植である。

然らば、皇國の手法とは何か。支那事變の前、揚子江に長年に亙つて、諸外國の船が屯して居た。日本の砲艦あり、イギリスの砲艦あり、アメリカの砲艦がある。或はドイツの砲艦、フランスの砲艦もゐるといふやうな風に、各國の艦が屯してゐた。日本は、いつも貧弱な、過去の遺物の標本のやうな時代遲れの艦を浮べて得々としてゐた。アメリカやイギリスやフランスは最新型の艦に立派な艤裝を施して浮べてゐた。その艦を見ただけで日本の實力とヨーロッパの實力とに大きな差でもあるやうにあちらの人たちは認めざるを得なかつた。そこで、自づと日本を侮つてゐた。滿洲國が出來た時、滿洲國の大官たちは、日本には、大した艦がないだらうと思つて居た。旅順港で、ある時、日本の本式の艦隊に招待して、艦の外觀並びに内部をも觀せたり動かたりしたところ、びつくりして、日本にも斯んな立派な艦があるのかと驚いた。上海邊りの日本の商人たちから、日本は何故あんな貧弱な艦をあすこに浮べて自ら敢て侮られるのか、などゝよく言はれた。が見せびらかしのために力を勞することは出來るだけ避けるといふ皇國の傳統的な考へ方が、自づとそこに現はれてゐると思ふ。『鼠獲る猫は爪を隱す』といふ諺が昔からある。宣傳的な見え坊を出來るだけ避けて、『爪を隱す』考へ方こそ日本的なものの考

へ方である。外國の侮りを受ける受けぬは問題でなく、一途に本來の面目を發揮しさへすればよいのである。敵を侮らしめ、深入りをして、あくまでのし掛らせておいて、さて愈々といふ時に、ガバと起上つて飛びかゝつて撥ねかへす。日本のやり方は萬事それである。わざと貧弱に見せるわけではないが、こけおどしをやらないから向ふはあなどつてのし掛つてくる。土壇場に行つて、ひつくり返す。クラウゼウイッツの戰法以上である。『日本は言擧げせぬ國』そこに皇國のよさ、皇國の本質がある。實力さへ備へてゐるならば、じつとしてゐて愈々となつた時に一擧に起上がるといふのが宜い。從つて口先や紙切れでぢやんぢやん言はぬ。宣傳謀略などには餘り心を勞しない。これが、日本的ぢやないか。宣傳謀略に負けても、力が內に充實してさへ居れば、心配することがない。却つてそれが後には大きな力になつて現れて行く。正直は最良の政策である。今日、皇國大本營の發表が世界的に信賴されて來てゐるといふことも、宣傳謀略を日本的に建直さうとしてゐる一つの現れではないか。

七

思想戰の在り方について、私どもが一番注意しなければならぬ點は、長年に亘つて日本人がヨーロッパの下馬になつて來たために、皇國の眞面目を日本人自身見失つてゐるといふ點である。例へばアメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、イタリー、日本、支那、ロシヤ、斯ういふ風に國々の名を並べて、日本はその七つなり八つなりの國の中の唯一つの國だといふ風に、今日、日本の世界的地位は隨分高まつて來てゐるけれども、なほその世界列强の中の一つだといふ風な低い意味にしか日本人自身、日本を評價してゐない。この考へ方を打破して、日

本自からは、諸國諸民族のリーダーとして立つてゐる、それは今始つたことでなく、肇國の古からその形で立つて來てゐるのだといふ風に、日本人自らの氣位を高めて行くことが、思想戰を戰ふ上に於て第一に必要な根本的な心構へである。これについて、本居宣長、平田篤胤、大國隆正あたりに現れてゐる、皇國世界觀、日本の優れた國體觀を强めて行く必要がある。大國隆正は、日本は世界萬國の總本國である、爾餘の國々はみな枝國である、さういふ認識に立つて總てのことを考へてゐた。幕末、アメリカから使ひが來て、江戸の將軍を對手に約を結ばうとした時、人々は反對した。條約を結ばれる御本體は京都に御座るのに、その御委任を受けてゐる將軍が、お許しをも受けずしてアメリカと條約を結ぶなど越權の沙汰だと云つて、それを幕府攻擊の武器にした時に、大國隆正は、許しは勿論得なければならぬが、談判に將軍があたつてそれで丁度宜い、アメリカの大統領、イギリスの皇帝、或はロシヤの皇帝といふ如きものは、京都にござる天皇とはまるつきり段違ひのもので、謂はば、あれらは世界國の諸侯のやうなものだ、日本でその世界國諸侯に相當するものを求むれば、差しづめ政治の御委任を受けてゐる將軍だ、だから將軍と大統領が對等のつき合ひをする、それで丁度宜い、とかういふことを云つてゐる。ところが當時の勤皇家たちは、大國隆正は、幕府支持だからさういふことを言ふのだと、きびしく批判されたが、しかし、大國隆正は、獨自の見識に於てそれをいつたので、一時的な政略論ではなかつた。日本國の見識に於て物を言つてゐたのである。日本の世界的地位の最も微弱な時代、戰艦の五六ばいも持つて來れば、ひと溜りもなく征服されるやうな武力、經濟力をしか持たなかつた當時に於いてすら、日本の天皇は世界の總王として

崇めらるべき幽契がある。今は東亞の蕞爾たる一島國であるけれども、やがて世界萬國の元首が諸侯の禮を執つて、天皇陛下に臣事する時が必ず來る、その故は、日本がたゞ賢いとか、日本人がたゞ腕つ節が強いとか、さういふことに原由するのでない、日本に備つてゐる本質が然らしめるのである、その源は、萬世一系の天皇が在しますからである、神國一世無窮の國體が然らしむるのである、この一世無窮の國體、萬世一系の天皇のゆゑに、やがて世界萬國みな日本に貢を奉つて、臣事する、斯ういふ幽契がある、といふことを道破してゐるのである。明治になつて、殊に鹿鳴館の踊り時代になつてから、次第にこの日本人の氣位が消磨してしまつて、段々に西洋崇拜に傾き始めた。今日、ヨーロッパ教育を受けた我々お互ひは、ヨーロッパといふものゝ價値を實質以上に大きく觀てゐる。實は彼等は、物質的には優れてゐるかも知れぬけれども、精神的、思想的には優れてはゐない。然るに、それも優れたものゝやうに受取つて、今日なほ西洋崇拜から脱け切らない狀態に多數の國民が置かれてある。大東亞戰爭勃發以來は、それが段々明かになつて來て、近頃では日本國民の氣位も追々には高まりつゝある。けれども一般はまだまだ迷ひは深いやうである。思想戰に卒先して起上らうとするものは日本國體の優越性を確信すると同時に、日本の世界的地位を諸國並に觀ないで、一段と上に見て、日本こそこの諸國諸民族を統べて行く力の源であり、光の源であるといふ確信を持つことが大切である。どうかすると、さういふ風な考へ方をするのを、或は神懸りだと云つたり、或は獨りよがりの自惚だと云つたりして蔑まうとする傾向が、インテリ層になほ脱け切らない。しかしさういふ風に考へることは、自から日本人たることを忘れて居り、また日本の本

質を歴史的に究め盡さない結果である。また、德川時代の先輩諸公が如何にそのことのために努力したか、例へば本居宣長の「馭戎慨言」の思想だとか、或は大國隆正の「馭戎問答」だとか、外國人に應接することについての心がまへ、思想的立場を明かにしたこれ等の書物を繙いて見れば、如何に條理正しく日本の世界的地位が道破されてあるかを知ることが出來るのである。さういふことを研究もしないで、日本單り偉がつても仕樣がないではないかといふ風のことを、これまではしきりに言ひ來つたのである。ところがひと度十二月八日以來の日本の進擊ぶりを見て、日本は、本當に偉い、とわれひとともに感ずるやうになつた。しかし、それは武力において優れてゐるのだ、他の方面においては位にしか、まだ國民の多數は感づいてゐない。そこをさうではない、武力は思想なしに生れて來るものではない、根柢に、皇戰の本質が武力の形をとつてあのやうに強く正しく働くのである、國體に淵源する精神力によつてあの偉大な力が現はれて來るのである、武器も優れてゐるけれども、武器では、更に優れた武器が外國にあるかも知れぬ、而も日本が絶對不敗の立場に立ち得るのは、精神力が優れてゐるからであるといふことを、日本人自から知つて居なくてはならぬ。

今一つの點は、世間でよく言はれる『日本的なものゝ考へ方』これを取戻さなければならぬ。謂はばヨーロッパ的思考法をもつてしては解らない思考法が日本にはあるといふ點、これは、大國隆正の著述に、「新眞公法論」といふのがある。オランダのヒューゴーといふ人が「萬國公法」といふ書物を書いて、萬國人悉くの準據すべき國際公法といふやうなことを說いてゐる。それは、これまで支那が自國を中華と云つて自分の國を非常に偉いも

のにして、周圍の國を東夷西戎南蠻北狄などゝ言つてさげすんだ、さういふ身勝手な主張を打破するには結構な思想であらう。支那の主張を舊公法といふならば、それに對してオランダの公法は新公法であらう。しかしながらさういふものは人が後天的に假に定めた人間の律法であつて、他に強い國が現れゝばいつでもひつくり返しになる公法、即ち御都合主義の萬國公法であるから、さういふものは眞の公法たり得る永遠性を持たない。「新眞公法」、新しい、さうして眞の公法といはるべきものは、世界造立の根本義を把握して立つてゐられる　天皇の詔こそ新眞公法である、天皇の詔を外にして萬國公法といふものは人類には有り得ない、かう言つてゐる。今日では、學問の基調が段々にあらたまつて來て、全世界の全人類に共通するやうなさういふ道とか法とかいふものは有り得ない、道は何國の如何なる民族の道か、といふことが中心命題とならなくては意味をなさない、と言はれるやうになつて來てゐる。『新眞公法論』の主張は此の說と全く揆を一にするのである。卽ちこの正しい、高い理想を持つてゐる民族の、その歷史的使命の顯現して行く姿が眞理そのものの姿である。萬國共通の空な抽象的な眞理といふものはあり得ないといふ考へ、この民族哲學の考へが、思想戰の一つの大きな根柢にならなくてはならぬ。

以上、二つのことを、私は、思想戰の根柢として、確かり把握して進まなくてはならぬと思ふ。一つは日本世界觀とでも言ふべきであらう。日本は均しなみに列國の一國ではなくて、見渡す限りの世界萬國の上に聳え立つてゐる指導的立場を執るべき使命をもつて生れて來てゐる國である、といふ信念を有つこと、今一つは、世界共

通の抽象理念普遍妥當性とか、平面的な自由平等とかいふものの考へ方はヨーロッパ人が考へ出した考へ方である。優れた國體を護持してゐる日本人の考へ方に富嵌むべきものではない。民族的なものの觀方に立脚して諸多の思想を解剖し、批判して進まなくてはならぬ。この二點が思想戰の根柢になくてはならぬと私は考へてをる。

（昭和十七年秋、研究所に於ける講話）

日誌要錄

五月十一日　所員研究會

出席者　伊勢賢作氏、鈴木所長、塚原、佐藤彬、佐藤孫二、萬澤、山川、田畑、菊池、前田、權藤、柏原、外に傍聽者として阿部利治氏、福田、後藤の二孃が列席された。

この日は、全日本科學技術團體聯合會の伊勢賢作氏を煩はして生産の實狀につき暫く話して戴いた。伊勢氏の話の後に全列席者より熱心な意見續出。結局國民的思想態勢の確立が生産部面に於ても重大意義を有することを確認。收獲は多大であつた。

五月二十日　所員研究會

出席者、下中顧問、塚原、菊池、佐藤彬、佐藤孫二、萬澤、田畑、山川、前田、柏原。所員外より白石司氏參加。

下中顧問より神社を中心とした國民生活確立の意義につき講話あり。各所員より意見披瀝。

五月二十五日　所員研究會

出席者　鈴木所員、塚原、佐藤彬、佐藤孫二、田畑、萬澤、柏原。

鈴木所長より奈良・鎌倉の時代精神につき講話あり。後、上代に於ける女性文化の問題が取り上げられた。

六月一日　所員研究會

出席者　下中顧問、塚原、佐藤彬、筒井、佐藤孫二、猪俣、小原、八並、山川、萬澤、柏原

アッツ島勇士の靈に默禱。痛憤遣る方なし。下中顧問よりアッツ魂顯揚の眞義について熱烈なる訓話あり。凜然たり、悚然たり。

六月八日　所員研究會

出席者　武野義治氏、下中顧問、塚原、筒井、山川、八並、佐藤孫二、小原、萬澤、柏原。

大東亞事務官武野氏を中心として支那問題、南方問題等につき意見を交換す。武野氏より種々有益な示唆を受けた。

六月十八日　所員例會

出席者　塚原、前田、山川、田畑、八並、佐藤孫二、猪俣、抽那、萬澤、柏原。

各自研究課題の提示が行はれ研究發表の具體的方法が論議された。

六月二十二日　所員研究會

出席者　塚原、前田、猪俣、八並、山川、小原、萬澤、柏原。

萬澤所員より「女人先唱」「根の國」の二題目につき研究發表があり、後、各所員より意見續出、討議は活潑に續けられた。

437
130

日本精神文化研究所

顧問　下中彌三郎
所長　鈴木重雄
所員　塚原富衛
　　佐藤彬
　　筒井敏雄
　　宮本幹也
　　權藤重義
　　山川時郎
　　前田寅雄
　　佐藤孫二
　　抽那長司
　　田畑喜作
　　菊池萬輔
　　小原巖雄
　　猪俣勝人
　　八並誠一
　　萬澤きき子
　　柏原秀子

日本精神文化研究所
研究報告　第一輯
（非賣品）
昭和十八年七月十一日印刷
昭和十八年七月十五日發行

編輯兼發行人　塚原富衛
東京都神田區神保町二ノ四〇
印刷所　石黑印刷所
東京都神田區一ツ橋教育會館
二〇七號室
發行所　日本精神文化研究所
電話九段三二〇五番